

愛の園ふちのべこども園「最優秀園実践発表会」 開催レポート

2022年11月19日(土)、2021年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で「最優秀園」を受賞した社会福祉法人さがみ愛育会愛の園ふちのべこども園による「最優秀園実践発表会」を開催しました。Zoom ウェビナーを使用したオンライン参加と現地開催では、様々な地域から総勢140人の参加となりました。オンラインと現地による公開保育を行うにあたり課題も多くありましたが、保育配信を専門的に行い、向山こども園副園長でもある木村創氏にお力添えいただき、ハイブリット形式で滞りなく実践発表会を挙行することが出来ました。

○発表会の概要

1. 日時：2022年11月19日(土) 9:15~12:45 (オンライン&現地)
2. 主題：自然が与えてくれる感動をもっと身近に～語り合い繋がる中で広がる世界～
3. プログラム
 - 1) 開会式
 - ・盛田昌夫氏より挨拶
 - 2) 実践発表
 - ・研究代表：田中宏忠
 - 『自然が与えてくれる感動をもっと身近に～語り合う中で繋がり、広がる世界～』
 - 3) 公開保育 (オンラインは渡邊氏と研究代表が案内・現地参加者は自由に参観)
 - 4) 指導・講評
 - 講師：渡邊英則氏
 - テーマ：子どもと共に学び続ける職員
 - 5) 記念講演
 - 演題：「科学する心を育む」～脳科学の視点から見た「わくわく感の重要性」～
 - 講師：小泉英明氏
 - 6) 閉会式

○実践発表 『自然が与えてくれる感動をもっと身近に』

◀園の紹介▶

・住宅街の中にある園で、近くの緑地へはバスで15分ほどの場所に位置します。たくさんの園児や保護者や職員が十分に自己発揮できるような多様性に富んだ園であることを目指しています。

◀過去3年間の論文の執筆で得た気づき▶

- ・一年目『生活を大切にすることから生まれる主体性と対話』
→遊びの瞬間にだけ、子どもたちに主体と対話を求めるのではなく、生活のルール等も自分たちで作り上げていくような生活の中から生まれるものであること。
- ・二年目『共通の視点を持つことで深まる子ども理解』
→宇宙というテーマを持つことで、子どもの発見に敏感に気づくことができ、かつ、保護者とも情報共有がスムーズにできるようになったこと。
- ・三年目『日々継続できる環境の中で深まる探求』
→子どもが自分のペースでいつでも探求をできるような環境によって探求が活発になるということ。

《研究テーマの設定》

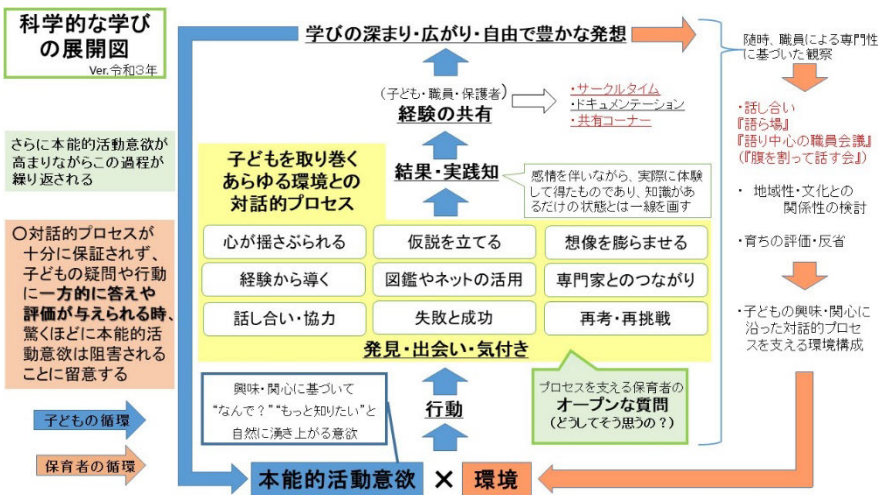
- ・池づくり

→なかなか行くことができない緑地の池では子どもたちの楽しそうな姿が見られている。園の中で、この姿を継続し探求を深められないかという思いが職員の語り合いの中から生まれた。

- ・プランター栽培

→畑での栽培からダウンサイジングしてプランターへと切り替えることで、いい野菜はできないかもしれないが、日々子どもたちが自分たちのペースでお世話できることを大切にしたいと考えた。

《当園が考える“科学する心”が育まれるプロセスについて》



子どもの『本能的活動意欲』と『環境』のかけ合わせの中で、『行動』が起き、『子どもを取り巻くあらゆる環境との対話のプロセス』を通して、『結果や体験を通じた経験』を得る。その『経験の共有』をする中で『学びの深まり・広がり・自由で豊かな発想』が生まれてくる。保育者はその姿から常に『環境』を考えていくことでこの循環がより豊かで活発に循環していくと考えています。

《池を中心として見られた子どもの姿を通して得た学び》

- ・アメンボとのかかわりを通して、同じ生き物でも出会い方で物語は違うことを知り、そこで深まる探求があることも知った。
- ・当園での子どもと生き物の最適な距離と安全管理を考え、話し合いの末にオリジナル策を考えることで、深まる保育者と子どもの探求があること。
- ・池と飼育ケースで見せるザリガニの姿の違いに、一つのものに対して色々な視点を持つことの大切さを知った。
- ・命というテーマを扱うときに、そこにいる職員の意識のすり合わせをしておく重要性を知った。
- ・“本当の共生”とは自分と他者との最大の利益を尊重しようと矛盾や葛藤の中で悩み抜く中でこそ実現するものであると気づきを得た。

《プランター栽培を中心に見られた子どもの姿を通して得た学び》

- ・2歳児においては、病気になった野菜に対して人間にするのと同じように手で撫でてやる姿に人間と植物という明確な境を持たない、もしくは区物しようとしめないこの時期にするべき体験で、その後の理屈を超えて植物を愛おしく感じるために必要な原体験であることを感じる。
- ・3歳児では大切に育てた野菜を『収穫して食べる』という認識ではなく、大好きで愛しいその野菜を友達のように扱う姿に、私たちが“使用価値”として捉えてきた野菜が、そこにあること自体に愛しさを感じる『存在価値』としての視点を教えてくれた。
- ・4、5歳児は、決まった活動をきっかけにして派生した個々の取り組みが、周りを巻き込み広がり、4、5歳児らしく探求を深めていく姿から、カリキュラムの在り方と子どもと共に保育を創造していく必要性を学んだ。

《今年度の池を中心として見られた子どもの姿から得た学び》

- ・放置されて水が溜まったプランターを見て、そこにビオトープを作りたいといったTさんの育ちについて、保育者でこれまでの彼の姿をあげながら考察。多様な経験の一つ一つが少しずつ繋がって、ビオトープ作りというプロジェクトが発足し、メダカとヤゴが共生できる環境づくりに向けて試行錯誤が行われる中で子どもが探求を深めていく姿が見られた。

《今年度のプランター栽培を中心として見られた子どもの姿から得た学び》

- ・去年度、アボカド実践の時には4歳児だったIさんが5歳児になり、種を育てたいと発言したことから今年度も種を育てる活動が広がった。去年度は興味を示している姿が見られなかったIさんから発信されたことも興味深い。しかし、リンゴと思って育てていたものが、身近に溢れる雑草のイヌタデだったことに落胆しつつも大切にしていた愛おしさ、イヌタデが子どもたちの特別な植物になったことで、子どもたちは色々なことに一生懸命向き合い、この世界を愛おしみ、それが地球を慈しむことに繋がっているということ知った。

○公開保育

- ・オンラインでは園庭の様子を渡邊英則先生と研究代表の田中教諭で案内しながら配信。
- ・現地参加者は自由に園内見学。



- ・園庭では砂場や工作コーナーでクリエイティブな活動をする姿。池では最近姿を見せないザリガニを探し、魚を捕まえようとする姿が見られた。
- ・園庭では、日頃職員が語り合う中で作られた保育教材や棚などの紹介や、これから緑化を進めていくにあたり行っている工夫などについて話をする。
- ・SDGsの視点から保育を展開していくために、園庭の木々の葉っぱをゴミとして捨ててしまうのではなく、コンポストを作成し、資源として活用している。また、保護者から祭りなどの行事で得た収益などをコンポスト作成の費用に使い、家庭にも関心を持ってもらっている。



- ・室内では、プランター栽培から発展した種の活動の姿や、園で行っているアートミュージアムという活動に向けて、飼っていた虫を廃材を使って作る姿が見られた。

○指導・講評 講師：渡邊英則氏 ※対談の内容を抜粋



・渡邊英則氏からの質問

「語り合う文化が実践の中でとても重要であり、魅力でした。経緯を教えてください」

→「園庭にままごと台が欲しい」という一人の呟きから、同じ思いを持った職員が繋がり理想が形になった。自分の思いを言葉にして語り合うことで、保育が前進する感覚を得て、それらが少しずつ広がっていった。その思いは誰かに押し付けられることでは広がらない、園全体で自分の思いを語る時間を作っていくことの大切さを感じ、園内研修も知識・情報共有を中心とした形式からそれぞれの思いを語り合う会議に変化。またそれ以外にも若手の職員や発言が苦手な職員が、自分の思いを話す機会が持てるよう「語ら場」という、週に一度の小集団による話し合いの場を用意した。それらの取り組みから少しずつ語る楽しさを実感、今の状況へと変わってきた。

・「変革しようとする人に対して、周りの反応はどうでしたか」

→ありがたいことに園長始め、経験の長いベテラン層の職員も、色々なメンバーが変化を起こそうとすることに寛容、協力的であり、適宜指導アドバイスもあったことで園の伝統と新しい知見がミックスされた。多様なこの時代に合わせて、「科学する心」を育む保育を考えることができている。

※この時間においては、あらかじめ話す内容や台本を作成せず、自由な対話を通して、日頃の語り合いの様子を広く伝えようとしていた。それが少しでも伝わっていれば幸いである。

○記念講演

講師：小泉英明氏

演題：「科学する心を育む」～脳科学の視点から見た「わくわく感の重要性」～



科学する心を育む
—脳科学から見た「わくわくする心」とその重要性—

1. 科学する心を育むとは？
2. ザリガニとダンゴムシは同じ仲間？
3. ゆりかごの中の科学者
4. 学ぶこと、そして教えることは？
5. 感動するときの脳：わくわく感とは何か？
6. 温かな心とは？

小泉先生がこの事業に携わるようになった経緯から始まり、『科学する心』の項目について、一つ一つ具体的なお話をいただきました。その内容を自園の実践に照らし合わせ理解することで、『科学する心』理解を一層深めることができました。

最後のピエール・キュリーの話の中では、「自分が発見した法則や発明を真似されても怒らず、喜んだ。サイエンスは人間みんな共通の宝物であり、自分が発見したものを誰かがさらに先に進めてくれることはありがたいことだ」という言葉がありました。それはまさに、私たち保育実践者が、日々保育を行い、幼児支援プログラム等の発表の場を通じて発見した様々なことをシェアし、共によりよい保育・社会の為に実践を進めていく姿勢と同じであると感じました。

私たちは4年間、「科学する心」を育む保育を実践する中で、一人の思いが他職員の思いと繋がり、語り合う中で“こんな保育をしてみたい”と『行動変容』が起き、その結果として保育がより楽しく、豊かになってきたように感じています。その中で、なんとなく感じていたとっても大切なことは、“子どもの科学する心が育まれている時は、保育者も「科学する心」が育まれている時”ということです。

この漠然と感じていたものが、小泉先生のご講演の中で明確なものになりました。キーワードとなった言葉は、『人間は行動し、五感で感じ、学ぶ』ということです。この情報に溢れた社会の中で体験しなくても知識は手に入ります。本を読みネットを見れば、よい保育とは何かという情報も溢れています。“よい子どもとは何か”という根拠のない情報さえ出てきますが…。それらはいわば“結果”です。小泉先生は、“より早く結果を導くためにあるものをコンピューター”と言いました。私たち大人は一步間違えると子どもに“よい結果を求める関わりをしてしまう融通の利かないコンピューター”になってしまうことがあるのだと感じています。おそらく、そこには真の“科学する心”はないのでしょう。少なからず、私たちは4年間の中でそのことを実感してきました。奇しくも「科学する心」を育もうと思った時には、育てている実感がなく、毎日をただひたすらに遊んでいる時、「科学する心」が育まれているように感じるのです。先生のご講演がこの難問のヒントを与えてくださったように思います。

〇まとめ

「科学する心」が育まれるためには、大人も子どもも『人間であること』が必要なのだと知りました。大人は“今日は子どもたちとどんな生活をしたら楽しいか”と考え、子どもは“今日はどんな楽しいことをしようか”と考える。つまり、子どもも保育者も『わくわく感を持って行動し、五感で感じることを通して学ぶ』ことがもっとも人間らしい姿であり、それこそが「科学する心」を育むことなのだとの確信を持ちました。私たちがなんとなく感じていたことが、小泉先生の脳科学の視点からお話しいただくで、とてもロジカルに理解を深めることができ、ますます今後の子どもたちとの生活が楽しみになりました。結果として「科学する心」も一層育まれていることを確信することができる研修会でした。

このような深い学びを、全国の多くの子どもと関わる皆様と共有できたことに大きな喜びを感じるとともに、これからも一緒に語り、学び続けていくことができれば幸いです。